

読書とN先生



デカルト（哲学者）1596～1650

星田 理

エッセイスト

私の中学生の頃は、太平洋戦争が終わった昭和20年の後半で、世の中がようやく落ち着き始めていた。その頃は農業生産が盛んだったから、中学3年ともなれば立派な働き手である。家に帰れば畑の手伝い、馬や牛の世話など仕事は何でもあった。だが中学3年は義務教育の最終学年、自分の将来を考えなければならない年頃でもあった。

新学期が始まって、新しい先生が来た。N先生はその春、大学を卒業したばかり。先生と生徒との年の差があまりなかったから、兄貴みたいな感じがした。先生の担当は、国語だった。

先生は、度の強いメガネをかけていた。生徒の中に意地悪な奴がいて「先生は、なんでキツイメガネを掛けているんですか」と冷やかした。すると先生は「そうだな、本を読みすぎたからかな」と笑って答えた。先生にはちょっとなまりがあった。だがそんなことに構わず、時折、ユーモアを交えた話し振りは、生徒に人気があった。

先生の授業は、ちょっと変わっていた。それは、教科書を使わない日があったことだ。その日になると本を抱えて教室に入ってきた。夏目漱石、芥川龍之介、川端康成などの全集であった。先生はその中から適当な作品を選んで、生徒に読ませた。そんな授業は初めてのことだった。本もろくに読んだことはないし、文学にはほど遠い授業を受けてきたから、はじめのうちは面食らった。だが繰り返しやっていると、生徒も本を読むことに慣れてきて、文学というものに、少しずつ興味を持ったことは確かだった。先生は生徒に本を読ませた後に、分かりやすく解説をしてくれた。そして、「お前たちの頃から本を読んでおくと、大人になったら役に立つ」と、いつも言っていた。

ある日のことだった。先生が「最近、何か本を読んだ者はおらんか？」と言った。だが誰も手を挙げる者がいない。先生はちょっと不満そうな顔をしていたが、急にこんなことを言い出した。

「みんな目をつぶってみなさい」言われるままに、生徒は目をつぶった。「何か見えるか?」「見えませーん」「次に、耳をふさいで見なさい」「聞こえるか?」「聞こえませーん」「じゃあ、今度は、頬ぺたを、思いっきりつねってみなさい」教室の後ろの方から「痛てーっ」と、大声を上げた奴

がいる。みんなが、どっと笑った。

先生は言った。「今、君たちに三つのことをしてもらった。最初は、目をつぶった。何も見えなかったな。これは、視覚のことだ。次に、耳をふさいだ。何も聞こえなかったはずだ。これは、聴覚のことだ。最後に頬つぺたをつねるようにいった。誰か、痛て一っと、声を出したな、これは、触覚のことだ。つまり、三つの感覚を確かめてもらったわけだ」

「まだある、臭いを嗅ぐ^かという臭覚のこと、最後の一つは、食べ物の味を感じる味覚のことだ。この五つ^かのことが人間に備わっている。これが、五つの感覚、つまり、『五感』というものだ。さて、ここで問題を出そう。仮に、この五つの感覚が、みんなの体から全くなってしまったら、いったい、体の中には何が残ると思う？」先生は難問をぶつけたのである。教室は、静まりかえった。

しばらくして、先生が言った。「答えは、もう出ている。今、君たちがやっていることだ。みんなは、先生の問いに対して考えていたな。実は、そのことなんだ。その『考える』ということだけが、残るんだ。「えっ一つ」と、みんなが言った。「つまり、『五感』がなくなっても、自分が『考えている』ということだけが残る、これは昔、フランスにデカルトという学者がいて、その人が考えたことなんだ」

「ちょっと、難しかったかな。たまあには、こんな話もいいだろ？」そう言って、先生は「今日は、これでおしまい」と言って教室を出て行った。

五感がなくなっても、最後に残るものは「考えている」ことだけ。これには、何か深いわけがあるように思えてならなかった。先生は多分、毎日の僕たちの生活を見て、中学3年になっても遊んでばかりいる。ろくに勉強もしないし、本など読んでいる者もない。だから、『五感』の話をすることによって、本を読んで「考える」という習慣を身に付けなさい、大人になったときには、役に立つから。先生は、そう言いたかったに違いない。

最近、パソコンの調子が悪くなって、2週間ほど修理に出した。テレビも併用できるものだから、自分の部屋からこの二つがなくなると、生活のリズムが狂ってしまう。最初の1、2日は、ぼけっ

としていたが、ハッと気がついた。いつの間にか、音と画像の世界に浸っていたことだ。近くの本屋に行って、単行本、雑誌などを数冊買って来た。2週間という時間は、至福の時間となった。

ある雑誌に、こんなことが載っていた。伊藤忠商事会長の丹羽宇一郎さんと作家の林真理子さんの対談である。二人とも本屋の子供に生まれた。今も、猛烈な読書家である。その中で丹羽さんは、「最近の若者たちの活字離れが深刻だ」と言っている。丹羽さんは入社式に、必ず話してきたことがある。それは、「一日のうち、30分は、本を読みなさい」ということだ。ある年のことだ。丹羽さんは入社式で話したことが実行されているか、調べてみた。結果は、ゼロだったという。そのことを大変嘆いておられた。一方、林さんの生家は本屋だったから、本は茶の間や階段まで置いてあり、本に囲まれて育ったという。二人とも口をそろえて言っていることは、読書は人間の思考力を磨くということだ。人間の経験などは知れたもので、読書からしか得られないものがある。読書は、論理的な思考につながっていくし、物事の本質をとらえる力が養われる。さらに、本を読む習慣を身につけると、年を取っても、一人で生きていく力と、寂しさに耐えられる力を得ることができる、と言っている。

パソコンとテレビのない2週間、読書の時間を持つことができた。本を読みながら、ふと、中学時代のN先生の言葉を思い出した。『お前たちの年頃から、本を読む習慣をつけておきなさい』その言葉は、懐かしくもあり、半世紀も経った今も、ここに残っている。

profile

星田理 ほしだ おさむ

1937年京極町生まれ。'61年北海学園大学卒。北海道開発局退職後は、民間勤務。現在は業界月刊誌にエッセイ連載中。囲碁四段。家族：妻、中国新疆ウイグル自治区出身の青年。
